

巻頭言

五十二年目への歩み

現代宗教研究所所長 三原正資

昭和三十九年（一九六四）に現代宗教研究所が創立されてから八年後のこと、日蓮宗は宗祖降誕七五〇年を迎えた。『現代に生きる日蓮聖人』（隆文館）は、その記念として現宗研がその決意を世に問うたものである。

渡部公允宗務総長（当時）は「序」をよせられ

私たちが今日越えねばならない険難の山は、きわめて高くて深いエゴイズムの山である。

と述べられ、中濃教篤所長（当時）は

物価高、公害、交通禍など、国内の不安は大きい。ひるがえって国際情勢を見れば、ベトナム戦争は停戦に遠く、パキスタン問題またアジアの緊張を強めている。

と記し、行間からは一九六四年の東京オリンピックから六十年代末の安保騒乱への時代の

空気が放射してくるかのようである。

現在、日本は二〇二〇年の東京オリンピック開催決定に狂喜しているかのようだが、内外の情勢を考えれば、お祭にうつつをぬかしている場合ではないだろう。

『現代に生きる日蓮聖人』を開くと、現宗研の創立に寄与された執筆者のほとんどは遷化されているが、創立から五十年、あらためて私はその語られていることに耳を傾けたいと思う。

なかでも興味をひかれたのは、「現代社会と伝道」と題された生々しい座談会の記録である。

私は、今後の教団の盛衰は、この一定レベルに達した教学実習者、つまり伝道者ののびにかかっていると思うのです。(略) 現在のわが教団の行っている伝道および伝道者の現状なのですが、まことに寂寥の感がつよいといわざるをえないのであります。

いわゆる教学とか、宗学とかいうものが、学問の性格として、自己純化というか、自分のもっている論理的精緻をますます加える方向にのみ熱心で、動いている歴史的社会的現実と対決していこうという姿勢がどれだけあるか。

したがって、教学が現実遊離となり、それが教団の精神面となるわけですから、教団や教学が現実を動かす作用力を欠いてしまう。それにつれて現実追隨が生まれ、深く現実に足をつつまない教学になってしまった。戦争がはびこった時にはそれに追隨して戦争肯

定し、立正安国でなく「立正報国」ということばを生み出した。戦争が終われば、「仏法民主主義」をもち出す。いつでも現実に追隨していく、そこに問題があると思います。

私は、僧は社会開発の導師でなければならぬと考えているのです。寺を社会財、文化財としてどう生かしていくか、公民館を建てようというとき、住民の先頭に立ってやるという自覚と使命感をもたなければならぬ。

私自身も含めて反省なのですが、戦後まもなく新憲法ができて家族制度がなくなった。すると寺と檀家の関係はだんだん薄くなって今までのような寺院経営はむずかしくなるだろうと一人残らずお坊さんは思った。そういう危機感のようなものがあって、だからなんとか考えねばならないと思って、日蓮宗革新同盟なども出てきたのだと思います。ところがしばらくたつとそうでもないという実情になってきて危機感はなくなくなってしまった。

そこへ創価学会がでてきた。ここでまた危機感をもったが、何年かたつとそうでもないということになってきた、ということが繰り返されてきていると思うのです。

僧俗一体ということが出てきたのには、一つは僧侶自身の反省があると思います。とくに若い僧などには、自分はいったい俗人とどこが違うのかと考えたら、理念では、今いわれたように違うけれども、実際生活では、車を乗り回したり、遊んでいてどこが違うんだというようなところからくる反省点もあったと思います。（略）

それからもう一つ、俗、俗というけれど、本当に社会を動かして行くには、俗と一緒に

なければ動きませんよ。俗のなかで活動している各分野を生かしてもらい、信仰的に深まっていたかなければ、とても皆婦妙法などできませんから。

さて、現宗研を創立し、そこに集まり、戦前・戦中・戦後の社会と教団の現状に対する問題意識を共有した方々の指摘されたことは、彼ら自らも加わった宗祖七百遠忌を目的とした「お題目総弘通運動」に至る宗門運動のなかで解決を図られようとした。ところが、そのころ私自身もいくらか関わったことから述べると、問題の解決に向かっていろいろの努力がなされてきたにもかかわらず、十分には問題の解決に至ることなく、私たちは創立五〇年の今日を迎えたと思うのである。

二一世紀に入り、わが国が人口減少時代に入ったことが明らかにされるとともに東日本大震災が起こり、加えて東京電力福島第一原子力発電所の過酷事故の発生はわが国の将来に大きな影を投げかけた。葬式離れ、墓離れ、寺離れといわれる三離れは進行し、無縁社会ともいわれる社会の劣化現象は、今後いつそう顕著になるにちがいない。

今こそ、法華経の精神を弘めるべき時である。宗祖降誕八百年に向かって「立正安国・お題目結縁運動」に精進し、現宗研五一年目への歩みをすすめようではないか。